

第 156 回大会

2018 年 6 月 23 日（土）・24 日（日） 東京大学 本郷キャンパス

口頭発表・ポスター発表要旨

The 156th Meeting of the LSJ

The University of Tokyo, at Hongo Campus, on June 23rd and 24th, 2018

Abstracts of Oral and Poster Presentations

<口頭発表 Oral Presentations>

[A-1]

中国語の原因型結果構文に対するフレーム・コンストラクション的アプローチ

陳 奕廷

中国語の“這種藥會吃死你” (this.kind-drug will eat-die you) ‘this kind of drug will make you die from eating it’のような原因型結果構文においては、複合動詞 V1V2 が再帰的な構造を持つ必要があると主張されている（石村 2011、于 2015、邱 2017）。本発表は「語彙的意味フレーム（陳・松本 2018）」という、動詞が指し示す動作だけではなく、動作と関連する事象の情報を含む意味構造を取り入れることで、V1V2 が再帰的かどうかを判断できることを示す。また、従来の研究では指摘されていないが、原因型結果構文には 1) ネガティブな変化しか表せない、2) 位置変化の場合は成立できない、という意味的な制約がある。この制約は、意味的に類似した使役構文（“使”、“讓”構文など）には見られず、再帰的な V1V2 という構造上の制限によって生じたものである。本発表は Sinica Corpus のデータに基づき、構文の「慣習化 (Traugott & Trousdale 2014 を参照)」という一般的なメカニズムからこの制約を説明することで、アドホックな規則を設ける必要性を回避できる。

[A-2]

日中コントロール現象における意味の役割

阿久澤 弘陽, 王 丹丹

本発表では、主文の先行詞と補部イベントの主語の解釈が一致するいわゆる「補部コントロール (complement control) 現象」、特に、定形コントロール (finite control) と呼ばれる現象を扱う。先行研究では、補部の時制形態がコントロールの有無を決めているとされてきたが、時制形態が必ずしもコントロール現象とは結びついていない例が少なからずあった。そこで、本発表では、時制形態ではなく、補部を選択する述語の意味がコントロール現象を決定づけていることを示す。また、明示的な時制形態を持たない中国語でも日本語と同様の事実が観察されることを確認し、日中のコントロール現象に対して主文述語の意味が与える影響を明らかにする。そして、主文述語の意味とコントロール現象の関係は、Farkas (1988) の「責任関係 (RESP(onsibility) relation)」という概念でうまく捉えられ

ると論じる。

[A-3]

従属節事態先行型カラ節内のル形の生起条件と否定的ニュアンスのメカニズムについて

小玉 安恵

本論では、従属節事態先行型カラ節内のル形の最新研究である田村(2013)の、非意志的因果のルカラの非ノダ文とルカラノダの非難の構文例の文法性判断、ルカラルノダ、ルカラタノダ、タカラタノダ文の非難のニュアンスの強度の問題に関し、それら判断と因果文の後件の書き込みを依頼するアンケートを日本語母語話者48名に実施した。その結果、ルカラノダ文の成立には、望ましくない事態とその責任を取るべき対象が文脈内にあることが最重要で、非ノダ文はルカラに一人称主語制限があることがわかった。また、同主語と異主語の非難構文はその強度に関する判断が分かれ、かつタカラよりもルカラに顕著に負の後件が来ることから、本論では非意志的因果の非ノダ文もノダ補文構造同様カラ節に認識時視点が設定可能で、非難の強度の差はカラノダ文の構造的曖昧さから、非難のニュアンスはルカラにより理由に焦点が当たる構造に限定されるために生じると考える。

[A-4]

「こんな紳士をつかまえて何をいうか！」—動詞「つかまえる」の文法化の観察—

氏家 啓吾

「こんな紳士をつかまえて何をいうか！」といった表現においては、物理的につかまえる事象がなくてもよいという点で、動詞の意味が希薄化している。本発表では第一に、この「NPをつかまえて」構文はある対象（典型的には話し手）への不当な評価に対して話し手が不満を表明する場面で使われるということを示す。第二に、その際目的語NP（「こんな紳士」）の位置に対象への正当な評価を表す言語表現が使われることによって、実際になされた不当な評価と話し手の考える正当な評価との対比が際立たせられていると主張する。第三に、この構文に動詞「つかまえる」のものの意味が生きているということ、1つの出来事を2つの節に分けて表現することが日本語の情報構造上の特徴に動機付けられているということを論じる。

[A-5]

日本語移動表現の直示情報と主体性：話し手自身の移動と第三者の移動の対照

石塚 政行

移動表現において言及される直示情報の種類と頻度は言語により異なるが、日本語は直示情報専用の表現手段を持つ言語の中でも直示言及頻度が高い。これは日本語が事象の中に視座を置く主体的表現

を好むという一般的傾向の一つと考えられる。この傾向を仮定すると、話し手自身の移動では第三者の移動よりも直示情報の表現頻度が低いと予想される。この予想を次の実験によって検証した。同一の経路の移動を、移動者自身の視点と、移動者を第三者として見る視点から撮影した2種類の動画を用意した。実験参加者は、いずれかの動画をその場にいるつもりで見ながら日本語で描写する(実況)。また、動画停止後に見た内容をもう一度日本語で話す(再話)。移動者視点条件で7人、第三者視点条件で7人の日本語母語話者から回答を得た。結果として、実況でも再話でも移動者視点のほうが直示情報を主動詞(来る、行く)で表現する頻度が明らかに低いことが確かめられた。

[A-6]

名詞性を持つ複雑述語・文末形式における自動詞構造の分析

新山 聖也

名詞性を持つ複雑述語「Vっぱなし」を取り上げ、「ランプが点けっぱなしだ」のように「他動詞+ばなし」が一項述語を形成する自動詞構造について分析する。一見、自動詞構造において他動詞の外項は出現せず、他動詞の項構造は保持されていない。

本発表では、動作主志向副詞のテストから自動詞構造にも見えない外項が存在していることを確認し、動詞句内部の数量詞生起から見えない内項が存在していることを確認する。以上の観察より、見えない外項と内項が存在する(1)のような構造を提案する。

- (1) [TP ランプ_i [NP [VP e_{arb} [VP e_i つけ]v]っぱなし]だ]

この分析では他動詞の内項が主語としてふるまう事実を、コピュラ文の主語との照応によってとらえている。この分析は「ランプが点けたままだ」のような文末形式でも応用でき、音韻語をなす複雑述語と句である述部の構造的な連続性を示唆している。

[A-7]

複雑述語における命題と推意 一開始を表す表現について一

日高 俊夫

先行研究(森田(1977), 寺村(1984), 姫野(1999)等)において取り上げられてきた「V-始める」「V-出す」「V-かける」に加えて、同様に開始を表す用法を持つ「V-て来る」を加えた4つの複雑述語の意味について、それぞれを使い分ける意味的基準を明らかにする。

具体的には、命題の意味のみを持つアスペクト専用の動詞「始める」を用いた「V-始める」が開始を表すデフォルト的な表現であるのに対し、視点、推意の情報をさらに細かく指定する必要がある場合は、命題の意味と共に非命題的な意味を持ち、「V-始める」よりも特定の意味を表せる「V-出す」「V-かける」「V-て来る」が選ばれることを示す。

また、少なくとも当該現象において「意図性」をプリミティブな素性として設ける必要はなく、「視点」の値から間接的に読み込まれること、推意の値は命題的意味を表すLCS等に対する解釈的意味として導出することを示唆する。

[B-1]

上代日本語の属格「つ」と数詞についての仮説

平田 裕

上代日本語の代表的な属格には「の/が/つ」の3つがあるが、確認できる「つ」の使用例は「の/が」と比べて少ない。先行研究では「つ」は場所や位置を表す語につく属格とされているが、それ以上深くは研究されていない。本発表では、万葉集における「つ」の使用例の検証、属格の変化に見られる方言間の共通性などを検証し、「つ」の用法は場所や位置に限定されることなく、(方言性は高いかもしれないが)上代の日本語では広く一般的に使われていたと主張する。更に、「ひとつ、ふたつ、みつ...」などの数詞の接尾辞である「-つ」が、属格「つ」から発生した可能性についても議論する。上代における「ももつしま(100の島)」、「いつとせ(5の年)」、「いつつ(5の物)」(cf. い-そ- [5-10]; い-ほ- [5-100-])などから考えると、数詞の拘束形態素を属格「つ」が受ける用法から、その後続の名詞を省略する形になり、「-つ」は形式名詞状態の接尾辞に変化したと考えられる。

[B-2]

古典日本語における「ての」について

菊池 そのみ

本発表は古典日本語における複合助詞「ての」について現代日本語との比較から、前接語、後接語に着目し、その機能について検討するものである。まず、現代語の「ての」は「子どもを連れての外出」のように動作性名詞が後続する傾向が強いことを茂木・森(2006)が指摘したが、本発表では古典語の「ての」は非動作性名詞が後続する傾向が強いことを報告する。次に、現代語と異なり、古典語では「ての」に形容詞が前接する用例が見られることを報告し、古典語の形容詞テ形に現代語のそれと異なる用法があることを踏まえて考察する。最後に、現代語において「ての」に相対名詞が後続する場合には「相対補充を表す」とする丹羽(2006)の指摘を踏まえ、古典語の「ての」の機能は、後続の非動作性名詞を時間的に位置づける相対修飾であることを述べる。加えて、動作性名詞の形成について古典語と現代語とで異なっている点を指摘する。

[B-3]

九州方言における主語標示の使い分けと動作主性

坂井 美日

九州方言には、主語標示=*ga* (G系) と=*no* (N系) がある。従来、尊敬主語=N系、非尊敬主語=G系という尊卑説が多くの支持を得ているが、実際は、尊卑だけでは十分に説明できない。本発表では、九州方言の具体的データを用い、まず非尊敬主語について、高動作主ほどG系、低動作主ほどN系という、動作主性に応じた分布が見られることを示す。なお、本発表が扱う方言は、動作主性の反映の結果、一部に自動詞分裂現象を生じる。続いて、尊敬主語の場合、非尊敬主語の分布をベースに、N系の領域が広がることを示す。従来の尊卑説は、この現象を部分的に捉えたものであろう。本発表では、これも動作主性で捉える。現代標準日本語等の傍証を踏まえると、尊敬表現の操作の一つとして、尊敬者の動作主性を弱めるということがありうると想定できる。九州方言ではその反映の結果、低動作主マーカ-N系が尊敬主語に付くと見れば、当該現象も、動作主性で説明できる。

[B-4]

係り結び現象を生む述語の機能 一通方言的な視点から一

林 由華

本発表では、焦点を示す係助詞とそれに呼応する結びの述語形を持つ焦点構文としての係り結び構文(狭義係り結び)について、琉球・八丈の諸方言で結び形とされる述語が持つ情報構造上の特徴を見る。Shimoji (2018) では、琉球諸語の焦点助詞(係助詞) *du* について、情報焦点(単なる新情報)と対比焦点(新情報であることに加え「強調」と目される)という2種類の焦点機能のうち、対比焦点のみの地域と対比焦点と情報焦点の両方を表す地域があることを示している。本研究は、結びとなる述語のもつ焦点特性について、それが係助詞の有無とは独立して(田)焦点範囲が述語より前にある/前から始まることを指定するものであること、また地域差として、(月)かつその焦点が対比焦点である(「強調」的である)地域もあることを示す。またこれにより、諸方言における(狭義)係り結びは、助詞と述語の両方による焦点の二重標示という現象であると言える。

[B-5]

日本語を母語とする幼児の右方転位文における主語の格標示について

團迫 雅彦

日本語を母語とする幼児の獲得過程において、主語の格助詞の「誤用」が規範的なS(O)V語順では見られるが、主語と述語が倒置された(O)VS語順(右方転位文)では観察されないことを報告する。例えば、(1)のようなS(O)V文では主語を与格や属格で標示することがある(Sawada, Murasugi and Fujii 2010 など)。

- (1) a. 猫ちゃんに行くんだって。 (Tai, 2:3)
b. たいしょう君の作った。 (Tai, 1:11)

一方で、(2)のように(O)VS文において右方転位された要素は主格主語のみが観察される。

(2) 怪我したの、おじさんが？ (Aki, 2;6,29)

また、述語の後に生起する与格名詞や属格名詞は、(3)のように主語としての解釈が得られない。

(3) a. バラいた、ここに。 (Aki, 2;6,29)

b. こうやって、この。 (Aki, 2;6,15)

これらの観察に基づき、獲得過程においてはS(O)V語順では主語の顕在的な統語移動が必ずしも必要ではないが、一方で(O)VS語順では主語が必ずTP指定部を経由して移動するために主格が大人と同様に付与されると考えることで、この語順の違いに関する非対称性が導き出せる。

[B-6]

日本語児における他動詞受身文の理解 —名詞句削除受身文と完全受身文を対象に—

石川 めぐみ, 伊藤 たかね, 郷路 拓也

日本語児対象の他動詞受身文理解実験では、完全受身文(例「さるがかえるに叩かれている」)より二句削除受身文(例「さるが叩かれている」)の方が正答率が高く、受身文理解の困難さは二句への意味役割転移操作に起因すると提唱されている (Okabe&Sano 2002)。だが、これらの受身文は名詞句数が異なり、この差による結果への影響が否めない。そこで本研究では、ガ句削除受身文(例「かえるに叩かれている」)を用いて二句削除受身文と名詞句数を揃え実験を行った。実験条件は、前述2種類の短縮受身文に完全受身文を加えた3条件とした。二句への意味役割転移が困難の原因なら、ガ句削除受身は二句削除受身より正答率が低くなると予測される。結果、ガ句削除受身文は1)二句削除受身文と正答率に差がなく2)二句を伴う完全受身文よりも有意に正答率が高かった。故に、受身文理解の困難さは二句への意味役割転移に起因するという仮説には再考の余地があることが示唆された。

[B-7]

幼児はポケモン名付けに音象徴を用いるか

小林 ゆきの, 磯部 美和, 桃生 朋子, 岡部 玲子, 川原 繁人

Kawahara et al. (2018) により、「ポケモンの名前に使われている音」とそのポケモンの「進化レベル」「体重」などに音象徴的なつながりがあることが指摘され、後の実験的研究により、このつながりに生産性があることも示された (Kawahara & Kumagai 2019)。本研究では、言語能力が比較的安定するが国語教育は受けていない幼児においても同様の音象徴効果(「母音の口腔の開き度合い」と「濁音」の影響)がポケモンの進化レベルの判定にどのように影響するかを検証した。実験参加者は6歳児24名(6;1-6;11, 平均6;7)で、実験では架空のポケモンの進化前と進化後の絵のペアと二つの名前を提示し、提示された二つの名前のうちどちらが進化後にふさわしいか判断してもらった。この実験の結果、[a]は[i]よりも進化後の名前に使われることが多く、また濁音を含んだ名前も同様に進

化後の名前に使われることが判明した。6歳児も音象徴的知識を有し、新しい生物の名付けに応用できることが示された。

[C-1]

閉音節における母音持続時間の短縮：鹿児島方言若年層の場合

小林 祐貴, 神谷 祥之介, 竹安 大

シラビーム方言である鹿児島方言では、東京方言などのモーラ方言とは異なり、閉音節中の母音の持続時間の短縮が起こらず、閉音節に後続する母音の持続時間が顕著に短くなると言われている。本研究では、鹿児島方言若年層においても上記の特徴が観察されるかどうかを、有意味語と無意味語を用いた産出実験により調査し、さらに、モーラ方言である福岡方言若年層の発音と比較した。その結果、鹿児島方言若年層の発音においては、閉音節中の母音持続時間は長くなり、閉音節に後続する母音持続時間は短くなったが、先行研究で指摘されているほど著しい短縮は観察されず、モーラタイミング方言と近いパターンを示すことが明らかとなった。一方で、単語全体の持続時間や、閉音節に後続する母音が単語全体に占める割合を見てみると、鹿児島方言若年層はモーラタイミング方言とも異なる形で閉音節に先行・後続する母音の持続時間を制御していることも分かった。

[C-2]

福岡県八女市黒木方言における子音語幹動詞のテ形派生音韻規則：韻脚を形成しない母音の削除

加藤 幹治, 井手口 将仁

九州方言では、子音語幹動詞のテ形の語幹末に、長母音が期待される環境で単母音が出現することがある (e.g. *tob-te*→*toode*「飛んで」 vs. *asob-te*→*asode*「遊んで」) が、従来の研究では、この単母音の出現の条件付けが語彙的か音韻論的かが未解決である。

本研究では福岡県八女市黒木方言を例に、韻脚という韻律単位を導入し、(1)語幹内の拍を語頭から二拍ずつ韻脚にせよ。(2)語幹内における韻脚外の母音を削除せよ。という二つの規則を設定することで当該方言のテ形派生における単母音の出現が音韻論的に条件付けられていることを示す。更に、この分析が他の九州方言における同様の現象にも適用できることを示す。

本研究の意義は以下の二点である：(i)記述に韻脚を導入することで、未解決であった単母音の出現を説明する点、(ii)日本諸方言の分析に「韻脚」という単位が有効であることを示す点である。

[C-3]

日本語の撥音の音声に関する調査 — 撥音に母音が後続する場合 —

韓 喜善

撥音に母音が後続する場合、話速や口調によって程度の差はあるものの、撥音は母音に近い音声として生成されやすいため、日本語母語話者であってもその音声を撥音でないと判断する可能性がある。

実験では、五千円 (/gosenen/)、ご声援 (/gose:en/) の 2 語を使用した。日本語母語話者 7 名による音声を日本語母語話者 20 名と韓国語を母語とする学習者 20 名（以下学習者）に対して、同定実験を行った。その結果、話者の意図した音声としての正答率は「上級学習者 > 日本語母語話者 > 初級学習者」の順で高く、学習者は日本語母語話者に比べ音そのものに過剰に注目しており、学習レベルによって注目の仕方が異なっていた。

一方、別の被験者を対象に、同一の刺激音を用いて自然さの判定の調査も行った。その結果、上記各々のグループで各音声に対する自然さの判断が異なり、母音が後続する環境における撥音に対する音の印象も異なっていた。

[C-4]

米ペンシルベニア州における後舌低母音/a, ɔ/の合流：空白の半世紀の歴史再建を試みる

木村 公彦

本米英語同時代史を理解する上で重要なアメリカ全土に拡大中の音韻変化の一つに後舌低母音/a, ɔ/の合流がある。合流が拡大中の地域の内、ペンシルベニア中南部英語 (SCPE) の使用地域は内外のドイツ語 (PG)・英語方言と接触する上、言語的保守性を有する共同体を含み、複雑で特殊な背景を持つ。この特殊性ゆえの意義があるにも関わらず、1940~1988 年の SCPE 内での合流の伝播過程は不明であった。本研究ではこの音韻史の空白を埋めるため、昨年拡張公開された 1960 年代の録音を用いて F1、F2 を指標とする音響分析を行い、2 母音の「弁別~合流」の度合を観察した。その結果、既に合流が拡大した地域が確認できた。SCPE の 2 母音間の音響的距離は弁別と合流の間であると解釈でき、そのような特徴を示す地域は PG 共同体の分布地域と一致する傾向があった。これは基層の構造が言語現象の伝播を妨害しうることを示す事例といえる。

[C-5]

Consonants and tones: A view from two Tibeto-Burman languages

Jeremy PERKINS, Seunghun J. LEE, Shigeto KAWAHARA, and Tomoko MONOU

Phonologically, consonants and tones interact with each other; for example, only certain tones are allowed after consonants with particular laryngeal features (e.g. only H tones are allowed after aspirated consonants in Dzongkha). Onset consonants are also known to block spreading of tonal features in Tsonga and Western Bade. To account for these consonant-tone interaction patterns, Lee (2008) proposed that onset consonants can be directly associated with tonal features. This theory predicts that there should be languages in which f0 differences due to tonal contrasts

manifest themselves during onset intervals. In this talk we report data from Dzongkha and Dränjonghke, which instantiate this phonetic pattern. We also develop phonological analyses of these tonal behaviors.

[C-6]

An acoustic study of dental vs. alveolar contrast in Tshivenḡa nasals

Seunghun J. LEE, Seth TSHITHUKHE and Michinori SUZUKI

In Tshivenḡa, dental and alveolar consonants contrast across various manners: nasal, lateral and plosives. In this talk, we focus on the nasals and report acoustic parameters that distinguish dental and alveolar place based on data collected from four Venda speakers (2 male and 2 female). A locus equation analysis of the stimuli (18 dental and 16 alveolar nasals in word-initial position) shows that dental nasals have lower F2 onset values compared to alveolar consonants for a F2 value at the mid-point of the vowel. Duration and F1 were also compared, but no significant differences emerged, confirming that locus equation is a reliable acoustic indicator for distinguishing dental from alveolar consonants.

[C-7]

声調交替のパラディグマティックな説明：グイ語における2つの豊語パラダイムの相互作用音韻史

中川 裕

声調交替は隣接の声調に働く同化(tone spreading)、異化(tonal OCP)、短縮(truncation, contraction)等のシンタグマティックな視点から説明されることが多いが、パラディグマティックな側面を考慮して初めてその本質を理解しうる場合がある。その事例として、コエ語族グイ語における反復豊語・使役豊語の派生に關与する声調交替を分析し、そこに觀察される不均整を歴史的に説明するために、パラディグマティックな視点が必須となることを示す。

当該の2種類の豊語派生には、不均整な声調交替規則が多く含まれる。発表では、不均整体系の歴史を遡って、規則的な均整体系を再建し、均整体系が不均整体系に至るまでの通時的シナリオを、2種類の豊語派生の声調交替規則セットの間にパラディグマティックに生じる相互作用(派生声調減少と2義性発生および2義性回避)の連鎖史として提案する。

[D-1]

Contrast, Quantifier Scope and Embedded Implicature

Satoshi TOMIOKA

The aim of this paper is to evaluate Geurts' (2010) proposal to deal with embedded implicatures by examining the presence/absence of intermediate implicatures when the relevant scalar items are contrastively focused. Contrary to Geurts' prediction, we will show that an intermediate implicature impossible even when the scale-inducing quantifier is buried within a scope island, and that an intermediate implicature can be generated when the quantifier takes the narrowest scope. While the data examined in the paper have no impact on the localist approach (e.g. Chierchia et al 2008), the globalist approach must (at least partially) incorporate the system the localists proposed, namely the presence of a sentential exhaustivity operator (*exh*) to generate intermediate implicatures.

[D-2]

A Modal Approach to *no*-clauses in Japanese

Akitaka YAMADA

With respect to distributional tendencies in BCCWJ, I identify 'prototypical' *koto*-oriented embedding verbs and *no*-oriented embedding verbs. Based on this classification, I spell out the idea that (i) *no*-clauses denote a set of events *but* (ii) a modal meaning is supplied by an embedding predicate. The analysis can account for the fact that the success of the entailment of the complement clause does depend on the embedding predicate. This claim is also extended to the agent obviation effect of *no*-clauses. In addition to supplying a modal environment for the complement clause, the embedding predicate imposes a requirement that the subject of the matrix clause should not be the same as the agent of the event depicted in the complement clause.

[D-3]

Wa-Questions in Japanese

Hitomi HIRAYAMA

This paper discusses questions with contrastive *wa* in Japanese. *Wa*-questions are treated as a kind of marked questions that require special contexts to be licensed (Farkas and Roelofsen 2017). The main goal of this talk is to identify what those special contexts are and to propose an analysis that accounts for the contextual properties these questions require. Specifically, I will claim that contrastive *wa* should be treated as a contrastive topic (CT), which can access Questions under Discussion (QuD: Roberts (1996)). By applying a modified version of the analysis of CTs proposed

in Constant (2014), I will derive the semantic denotation of wa-interrogatives: a set of polar questions that ranges over a set of focus alternatives.

[D-4]

p と q が一般規則によって形成されている条件構文についての考察

森 創摩

本研究は、p と q が一般規則によって形成されている条件文を演繹/アブダクションに基づいて構築されているかどうかという基準で、(i) 演繹的条件文、(ii) アブダクティブ条件文、(iii) non-DA 条件文 (“non-DA”とは演繹的でもアブダクティブでもない (**non-deductive and non-abductive**) ことを意味する) の 3 タイプに分類することを提案する。そして non-DA 条件文は、if 節のカテゴリーステータスの違いにより、(A) 依存性 non-DA 条件文 (p-q 間に依存関係がある non-DA 条件文)、(B) 関連性 non-DA 条件文 (p-q 間に依存関係がない non-DA 条件文)、(C) frankly タイプ non-DA 条件文 (if 節のカテゴリーステータスがスタイル副詞類/スタイル離接詞 (e.g. *frankly, candidly*) と同じ条件文) の 3 タイプに下位分類されるのが妥当であると主張する。本研究の目的は、条件構文に対する先行研究の分類方法よりも多くの言語分析上のメリットが得られる分類方法を示すことである。

[D-5]

日本語における状態述語の意味的な住み分け 一程度性とスケール構造の観点から一

大島 デイヴィッド 義和, 秋田 喜美, 佐野 真一郎

状態を表す 3 つの日本語の文法範疇—イ形容詞 (「高い」)・ナ名詞 (ナ形容詞とも ; 「高価 (な)」)・述定専用ノ名詞 (ノ形容詞とも ; 「無料 (の)」)—の意味特徴について、実験調査の結果を踏まえて考察する。イ形容詞・ナ名詞は、述定専用ノ名詞および英語など欧州諸語における形容詞と比較して程度性を持つ傾向が強いことが主張されているが、これに関して十分な裏付けはなされてこなかった。また、近年の意味研究によって確立された程度性の下位分類 (相対程度/最大基準型絶対程度/最小基準型絶対程度) を考慮に入れていない点も、先行研究の限界として指摘できる。日本語の 3 範疇および英語形容詞を対象とした体系的調査を行い、以下のような知見が得られた。(i) {イ形容詞・ナ名詞} > 英語形容詞 > 述定専用ノ名詞の順で相対程度性を持つ傾向が強い。(ii) 日本語 3 範疇のいずれも、英語形容詞に比して絶対程度性を持つ傾向は強くない。

[D-6]

日本語における慣用句の創造的使用について 一形容詞の反義語を手がかりに—

鈴木 あすみ

慣用句は一般に固定性が高く、語彙的柔軟性を欠くとされている。「太い」と「細い」が反義関係にあっても、「食が細い」に対して「食が太い」は一般に慣用句としては認められず、慣用句辞書等への掲載も確認されない。しかしながら、本研究では『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』を用いた調査から、「食が太い」のような耳慣れない句が、しばしば語順の入れ替えや副詞の挿入といった変形を受けながら、実際に使用されている例が多く確認された。このような表現は文脈中に元となる慣用句やその類義表現、反義表現を伴って用いられる場合が多い。新奇な表現の受け手は文脈の支持を得て元となる慣用句を想起し、その情報に基づいて新奇な表現の意味を推論していると考えられる。慣用句など既存の表現の一部を操作して創り出された言葉遊びの意味を理解する過程において、文脈の情報が果たす役割は非常に大きいということが示唆される。

[D-7]

「やすい」文における状態性と動作性

鈴木 基伸

本研究は、「X OBL V する」に「やすい」を接続させた場合に成立しうる「X が V やすい」（以下、昇格「やすい」文と呼ぶ）と「X OBL V やすい」（以下、斜格残留「やすい」文と呼ぶ）とを比較し、両者の意味の違いや格交替を容認・拒絶する条件について、形容詞相当句における語構成の違いという点から説明を試みるものである。基の動詞句が持つ構造を保持するか否かによって、昇格「やすい」文は状態性、斜格残留「やすい」文は動作性という構文特性を認めることができる。結果、前者は「V スルコト」という事柄に対する容易さを表し、後者は「V スル」、つまり非過去という時制解釈も加味した動作に至るまでの容易さを表すという仮説を立てることが可能となる。この仮説に基づけば、従来述べられている両者の意味の違いについて説明が可能である。また実例の分析から、斜格残留「やすい」文における動作性は、統語的条件によって状態性へと傾くこともわかった。

[E-1]

副詞応答文 Really? について

平田 一郎

発話の命題の正しさに疑念を抱く場合、聞き手は副詞 Really? を単独で用いて発話の命題の正しさを発話者に質すことがある。しかし、時としてこのような Really? が、先行する発話の命題以外の正しさを質すことがある。本発表ではそのような Really? の例として、①（非言語的）意図明示的伝達行為の適切性を問う、②発話内行為の場面での適切性を問う、③発話の命題に含まれる語句の選択（という行為）の適切性を問う、の3種類を挙げる。こうした Really? は、それぞれの行為の適切性を質すことになる。しかし実際に質されるのは（行為が行われていることは明らかなので）行為そのものではなく、行為によって生まれると発話者に当然視された推意、あるいは発話媒介行為であることを

指摘する。本発表では、このような Really? の解釈が関連性理論で想定されている「関連性の伝達原理」によってもたらされると提案する。Really? は、見込まれた関連性に疑義を唱える表現であると分析する。

[E-2]

省略現象から見た日本語動名詞句の構造

内芝 慎也

(1)に見られるように、日本語において動名詞(verb *noun*)は通常の名詞とは異なり単独で省略することができない。いずれの文においても、「次郎の」の後に「相席」という名詞が省略されているが、不適格文である(1c)でのみその名詞は動名詞として使用されている。本発表では、このような省略に関する動名詞と通常の名詞との相違はそれらの内部構造が異なっていることに起因することを論じる。具体的には、通常の名詞は DP まで投射するのに対し、動名詞は NP までしか投射しないと主張する。この主張が正しければ、Bošković (2008)等の主張に反して、冠詞を持たない日本語などの言語において名詞は DP まで投射しうることを意味することになる。

- (1) a. [太郎との相席]は難しいが、[次郎との]は問題ない。
b. 花子は[太郎との相席]を断り、[次郎との]を承諾した。
c. *花子は[太郎との相席]をし、順子は[次郎との]をした。

[E-3]

Possessor raising in Mandarin unaccusatives

Muyi YANG

This paper argues for a semantics-centred account of possessor raising (PR) in Mandarin unaccusatives, a construction in which an unaccusative verb seems to take two nominal arguments:

- (1) Zhangsan si-le fuqin.
Zhangsan die-PERF father
'Zhangsan's father died.'

The proposal aims at capturing the following properties of PR: (i) the possessor-possessee relation between the NPs; (ii) the incompatibility with unergatives; and (iii) adversively- or benefactively-affected interpretation. Building on Pylkkanen's (2008) proposal of applicatives, I argue that the interpretation of PR originates from a low applicative head inserted within VP, from which (i)-(iii) naturally follow. Combining lexical semantics, the analysis also makes correct predictions regarding the incompatibility of certain unaccusative verbs with PR, as well as the dependence of

affectedness on verbs.

[E-4]

An adjunction approach to the PSP construction in Japanese

Kaori MIURA

There is a type of adjectives (e.g., *tasty* and *fun*) which is often dubbed as ‘predicates of personal taste’ (Laserson 2005). Matsuoka (2016) reports that these adjectives (PSPs) in Japanese can precede or follow the object and its associated numeral quantifiers (thereafter, NQs), but it cannot intervene between them. In order to explain this fact, he claims that they are merged to the complement of V by Ko’s (2011) Edge Generalization (thereafter, EG). In this study, I counter-argue this complementation. Alternatively, I propose PSPs are VP-adjuncts by investigating the VP-constituency of PSPs such as the *wh*-extractability, and so on. I also show that this alternative proposal is in harmony with the EG as well.

[E-5]

日本語の部分構造を持つ統語構造について

三山 美緒子

本発表では、日本語の部分構造(partitive)の文(1)において、「部分」と「全体」の意味役割を持つ二つの要素が(2)のようにそれぞれ限定詞句 (Determiner Phrase) であると主張することで、可能な統語構造や語順を説明することを試みる。

(1) 太郎は_[Whole (本棚にあった) 本]の (うちの) _[Part 三冊]を読んだ。

(2) 太郎は_{[DP [DP (本棚にあった) 本の (うちの)] [QP 三冊を]]}読んだ。

(2)のように全体要素の DP が部分要素の DP の指定部にある構造を提案することで、部分や全体の要素それぞれに数詞や名詞が現れる例文が自然に派生され、また部分要素と全体要素がそれぞれ DP を投射するため DP 内部で様々な語順が可能である例文も説明がつく。さらに、本発表の提案では全体要素がなくても部分要素が独立した DP を形成しうることを予測するが、(3)のように部分構造の解釈を持たない例文はこの例であると主張する。

(3) 太郎は三冊の本を読んだ。 / 太郎は本三冊を読んだ。 / 太郎は本を三冊読んだ。

[E-6]

日本語の間接受動文と使役文における補文主語とラベル付け

片岡 恋惟

本発表では、日本語の間接受動文と使役文における補文主語が主節へ移動しているという経験的証拠を示し、さらにその移動が Chomsky (2013)におけるラベル付けの必要性によって説明されることを論じる。英語の ECM 構文と同様に、日本語の間接受動文と使役文では、以下のように補文 α は補文主語 NP と動詞句から成る {XP, YP} の形をとるためラベルが決まらない。

... [_B NP₁ [_{PassP/CausP} [_{α} t_i VP] -られ_{Pass}/-させ_{Caus}]]

日本語に ϕ 素性共有がないとすると、補文主語は α のラベル付けのために主節へ移動しなければならない。ただし、その際の移動が Set Merge であれば、移動先の B において再びラベル付けの問題を生じるが、Pair Merge であれば、付加操作の定義から B のラベルは PassP/CausP となる。さらに、このラベル付けによる移動の説明を支持する経験的な証拠として、補文が {H, XP} の形をとる非対格動詞から作られる間接受動文や使役文では、実際にラベル付けのための移動が起きないことを示す。

[E-7]

ラベルにおける Head の強弱の除去

林 慎将

本発表は以下の二点を目標とする。(i) Chomsky (2015): POP+におけるラベルの弱さを unvalued feature に基づき説明する。(ii) Feature inheritance: FI は任意に起こると提案する。

(i)に関して、POP+では英語の T は弱く、補文標識 *that* に続く主語の移動を禁止する *that-t(race)* effect が起こる。豊かな屈折を持つイタリア語では T は強く、*that-t* effect は見られない。しかし、POP+では、(1) 主文主語が省略された際の unvalued feature、(2) 屈折が無い日本語の T の強さの二点が問題となる。本発表では、ラベル決定の際の minimal search により一致が起こると想定し、*that-t* effect は T の unvalued phi feature が引き起こすと主張する。イタリア語では *pro* を想定し、(1) を説明する。Feature の強弱性の仮定は不要となり、日本語の T も強いと考えられる。

(ii)に関して、Epstein, Kitahara, and Seely: EKS (2016)は、bridge verb の派生に対し派生の前に R と v^* を pair-Merge する external pair-Merge を提案した。EKS は受動態も同様に派生するが、能動態に external pair-Merge が含まれる bridge verb の受動態をどのように派生するのか、等問題が生じる。本発表では EKS の問題の解決と更なる可能性の発展を探る。

[F-1]

日本手話の「いう」の拡張：証拠性と習慣性・一般性への経路

高嶋 由布子, 黒田 栄光, シャーマン・ウィルコックス

本発表では、日本手話の「いう」の用法の拡がりや文法化について報告する。伝達動詞としての〈言う〉は、一人称が発言することをマークするが、主語が脱落し、命題を表す文に「いう」が後接すると、話者の経験や共有知識という証拠に基づく〈断定〉のマーカーとなる。これは直接経験と意外性

への拡張も持つ。一方で、三人称の主語を示したのちにその主語が述べたことに「いう」が後接される〈伝聞〉用法がある。この主語が示されないと、その情報が他者の〈引用〉の証拠性マーカーとなる。引用用法では、「いう」の動きが他と異なる。さらに〈断定〉は、コンピュータ的な参照点構造を作りだし、主語の行いの叙述に「PT（主語）いう」を後接することで、その主語の行いが、主語の性質に帰属すること、すなわち習慣性・一般性を表すという広がりを持つ。これらそれぞれは、調音は大幅に変わらないが異なる構文にあらわれることから、文法化の例とみなすことができる。

[F-2]

日本手話のロールシフトと談話表示理論

小藪江 聡, 原田 なをみ, 高山 智恵子

手話言語では、手話の表出者が他者の視点を取って命題を表現するロールシフト (role shift; 以下 RS と省略) が頻出する。従来の研究では、RS は主にその非手指表現 (目線・頭・体の向きなど) を指標として分析されてきた。本研究では、一見手話言語独自と見られる事象が談話表示理論 (Discourse Representation Theory) によって分析可能であることを示す。日本手話読み取り教材の視聴覚教材から RS が頻出する箇所を取り出し、2 名の日本手話母語話者による分析を実施した結果、日本手話の RS において、これまで言及されてこなかった、以下の二つの特徴が判明した。

- (A) 日本手話の RS の表出の際、対象物をまず指差ししてから、その対象物の名詞を手で表出する。
- (B) 一人の手話話者の身体で、同時に複数人の会話を RS により表出することが可能である。

[F-3]

誤った単語アクセントの再解釈の仕組み：脳波の時間周波数解析・事象関連電位による検討

直江 大河, 木山 幸子, 時本 真吾, 馬 瓊, 汪 敏, 小泉 政利

日本語母語話者は、誤った単語アクセントを正しいものに再解釈する能力を持っていると考えられている。しかし、実際の単語認知における再解釈が、語彙検索段階における無意識的なものか、意識的なものかは不明である。本研究では、聴覚-視覚刺激一致課題中の被験者の脳波を計測・分析し、これらの仮説の妥当性についての神経科学的証拠を得ることを目指した。(1) 聴覚刺激提示時の脳波を事象関連電位 (ERP) 分析した結果、正しい単語アクセントと比べて、誤った単語アクセントに対して P350 とみられる陽性成分が増大し、語彙検索段階における処理負荷が高いことが示された。(2) 視覚刺激提示時の脳波を時間周波数 (ERSP) 解析した結果、聴覚刺激のアクセント正誤に関わらず、聴覚-視覚不一致条件に対して、一致条件でガンマ波 (30Hz 以上の高周波) の増幅が認められた。これらの結果から、誤った単語アクセントは語彙検索の段階で無意識的に再解釈することが示唆される。

[F-4]

日本語母語話者のあいまいな関係節における解釈修正の可能性：

自己ペース読み課題による日英語間の比較

伊東 香奈江, 哈 芸婕, 小泉 政利, 木山 幸子

日本語母語話者の日本語と英語における関係節 (Relative Clause: RC) の曖昧性処理の過程を比較するため、①自己ペース読み課題と選好判断課題、②紙面によるフォローアップ調査を行った。①日本語では、自己ペース読み直後の選好判断において、中立な内容の RC を含む条件 (Neutral 条件) では関係節から遠い名詞 (Distant Noun Phrase: DNP) よりも関係節から近い名詞 (Close Noun Phrase: CNP) を修飾する解釈が好まれ、DNP に関わる内容の RC を含む条件 (DNP-Preferred 条件) では CNP よりも DNP 解釈が好まれた。英語では、Neutral 条件より DNP-Preferred 条件の RC 読み時間が長かった。②両言語ともに、DNP-Preferred 条件の選好判断で CNP 解釈をした場合に、同じ文をフォローアップ調査では DNP と解釈する傾向が有意であった。

あいまいな関係節の読解時には、関係節の意味内容と密接な名詞とを結び付けて解釈するという知識は有するものの、実際の処理では関係節が CNP を修飾する解釈を一旦検討し、内容によって DNP を修飾する解釈に修正する過程の存在が示唆された。

[F-5]

「V1 て V2」が表すイベントによる再構造化の有無

呉 佩珣、宮本 エジソン 正

再構造化(restructuring)とは、動詞が2つ隣接する(例:「V1 て V2」)ことによって項構造の結合が行われ、単一動詞句となる現象である。Nakatani(2006)は V2 が補助動詞の場合、再構造化の効果で負荷が軽減され読み時間が早くなると述べた。しかし、V2 が補助動詞の場合でも、V1 と V2 が表すイベントの時間関係によって再構造化が生じない場合がある。本発表では、時間的同時関係を表す「V1 て V2」では再構造化が起きるが、継起関係を表す場合は再構造化が生じないとして、読み時間実験を通して検証した。刺激文の条件は、「V1 て V2」が表すイベント(継起・同時)と語順(ニヲ・ヲニ)の2×2の4条件と設定した。結果、「同時/ニヲ」の条件は Nakatani(2006)と同様に、再構造化が起き、ヲニ語順の条件と差が見られなかった。「継起/ニヲ」の読み時間が最も遅かった。それは、継起関係を表す「V1 て V2」のため、再構造化が起きず、入れ子構造となり、ヲニ語順より処理負荷が増大すると考えられる。

[F-6]

Take hatred and turn it into love : 「余剰 take 構文」の記述的研究

平沢 慎也

英語では turn hatred into love の意味で take hatred and turn it into love とも言える。このように、

[take+NP_i +and+V+PERSONAL PRONOUN_i ...] という形式をとり、単に V+NP_i ...と言っても真理条件的に等価である構文を「余剰 take 構文」と呼ぶ。この構文では take の意味が希薄化している。しかし、take NP_i 部分が、V+NP_i の表すプロセス全体のうち「NP_i に働きかけるための準備段階に NP_i を持ち込む」というフェーズを焦点化しているという点では、take の「手に取る」の意味が多少は生きているとも言える。この分析は、余剰 take 構文を、「初動明示 VP₁ and VP₂ 構文」(VP₂ の動き出し・初動フェーズを VP₁ として明示してから VP₂ を後続させる構文) の一種として位置づける分析である。

[F-7]

制御不能感と日本語被害受身 一周辺事例から見えるもの—

町田 章

日本語には「酒に飲まれる」のような表現があるが、この文の「飲まれる」は明らかに通常の受身ではない。「酒」が「飲む」という行為を行うわけではないからである。認知文法では、通常、動作主・被動作主に課されたトラジェクターとランドマークが談話機能上の理由で入れ替わったものが受身文であると考えられているが、この受身ではそれが見られない点で特異である。本研究では、この特異な受身は「本来事態を制御すべき有情の動作主が完全にはその事態を制御できず、本来制御される側である無情の被動作主がある種の行為者として一定の範囲で事態を制御している状況」を表しており、その際に生じる「有情者の事態の制御不能感」がより一般的な被害受身に見られる被害性の出所であると主張する。そして、このような周辺事例を詳細に検討することで、より中核的な事例に内在する重要な性質を明らかにすることもできると主張する。

[G-1]

八丈語三根方言の人称・指示代名詞の複数と階層性

三樹 陽介

本発表では、八丈語三根方言における人称代名詞・指示代名詞について、国立国語研究所の消滅危機言語プロジェクトの一環として体系記述の精緻化を目的として行なった7・80代の生え抜き話者への臨地調査で得たデータをもとに、先行研究で示されている体系に新しい記述を加え、正常複数と近似複数との対立が階層性を伴って存在することを論じる。

まず、新情報を加えた人称・指示代名詞の体系を示し、1 人称複数では包括と除外の区別がないこと、2 人称では現在一部の用法に変化(単純化)が進んでいることを示す。次に、先行研究で指摘されていない複数接辞-rara について報告し、既知の-ra に新たに-rara を加え、複数接辞を2系列に整理することで八丈語に正常複数と近似複数との対立が明らかにするとともに、併せて複数接辞の付与には階層性があることを論じる。さらに現在進行中の数のカテゴリーの変化についても論じる。

[G-2]

アイヌ語沙流方言における親族名詞の限定所有と呼格的用法 —フレーム意味論による分析—

喜多 直人

アイヌ語沙流方言の親族名詞が所有対象名詞となる限定所有について、参照点理論とフレーム意味論に基づく分析を行う。例えば *ku=kor mici* ‘私のお父さん’ と *k=ona-ha* ‘私の父’ は形式が互いに異なる。本発表では親族名詞のペアを提示し、以下の2点の差異に着目する。すなわち (1) 限定所有の形式の違い (2) 呼格的用法の可否 (cf. 鈴木 1973, Dahl and Koptjevskaja-Tamm 2001) の2点である。呼格的用法が可であるものは所有対象になるときに‘人称接頭辞=*kor* 所有対象名詞’の形式となり、不可であるものは‘人称接頭辞=所有対象名詞 (-接尾辞)’の形式になる対応関係が見いだされる。前者は典型的に所有権関係を表す構文、後者は全体-部分関係を表す構文である。呼格的用法が可であるということは1人の独立した人間として認識されていることを示唆し、参照点に対する概念的独立性が高いといえる。よって、親族関係の基点人物 (=参照点) に対する独立性が所有形式の差異に反映されていると主張する。

[G-3]

オリヤ語で、人称制約が見られる構文環境と、そうでない構文環境

山部 順治

オリヤ語では、2個の目的格標示の名詞句 (以下、「2目的格句」) が特定の構文環境に現れるとき、統語的に下位のほうは1または2人称であってはならない、という制約 (以下、「本制約」) がある。

本発表は、本制約でいう特定の構文環境を次のように特徴付ける：統語構造上、動作主主語が存在しない節において。節に動作主主語が存在しない、とは、次①②のいずれか：①主語が欠けている；②主語があるがそれが意味的に動作主でない。

例証にあたっては、2目的格句が二重他動詞 (例、「与える、見せる、気づかせる」) の目的語 (受け取り手と動作対象) である場合に注目する。2目的格句の現れる構文環境として、次4種を点検する：(あ) ふつうの単文、(い) 非人称文、(う) 非情物主語、(え) restructuring 構造をした制御構文補文。(あ) では、二重他動詞の節の内部に動作主主語があり、本制約の適用が免れる。(い) ~ (え) では、①または②の理由によりそれがなく、本制約が適用される。

[G-4]

一時的な全体部分関係：チェコ語の所有動詞 *mít* の場合

浅岡 健志朗

チェコ語の動詞 *mít* を中心とする他動詞文（所有文）は、基本的に恒常性の低い関係（例：机の上に本があるという関係）を表現することができないが、これが可能な場合がある。具体的には、(i)コントロール（ある参加者が他の参加者に対して能動的に働きかけ変化をもたらすことができるという関係）が成立している場合（例：その動物園は昨日パンダがいた）、副詞句の場所表現を含む場合（例：そのパーカーはここにほこりがついている）、主語指示対象を対比する文脈の場合（例：この机には本が乗っているがあちには乗っていない）である。(i)は一時的でかつコントロールを含むという点で、全体部分関係よりもむしろ所有権関係からの拡張事例として位置づけられる。(ii)には所有者が所有物の空間的な位置を限定するという所有文の機能が、(iii)には述語が表す事態の解釈における中核要素を担うという主語一般の特徴がそれぞれ関わっていると考えられる。

[G-5]

アラビア語チュニス方言の「SV」語順と主題化

熊切 拓

アラビア語チュニス方言の物語テキストにおいて、主語 (S) と動詞 (V) の語順を調べると、SV 型、VS 型、そして S の現れない V 型の 3 つの型があり、最後の型がもっとも多い。このうち SV 型では、その半数以上の例が「S は～して、いっぽうその時に S' は～する」という、2 つの主語 (S と S') を対比的に示す構文であった。この構文は「SV そして S'V」という構造をもつが、さらに調べると、主語どうしばかりではなく、主題化された目的語と主語、もしくは主題化された前置詞補語どうしも同様の構造において対比されていることがわかった。そこで、これらの例を「主題化を通じて複数の事態の対比や同時性を表す構文」としてまとめるとすると、この SV 型もまた、主語が主題化された構文だと解釈できる。すなわち、この言語においては、SV 語順とされるものの過半数は、実際には「主題が前置された V 型」として V 型に還元できるものと考えられる。

[G-6]

クブサビニ語の Associated Motion を表す構文：類型的観点からの分析

河内 一博

クブサビニ語（南ナイル、ウガンダ）の associated motion (AM) を表すのに使われる構文（例：「こちらに來ながら電話を見続けた」で、動詞「見た」に直示と経路の接尾辞を付ける）は、他の言語の AM を表す構文に関して先行研究で言われているのとは違う以下の特徴を持つことを報告する。(i) 単純なシステムである、(ii) prior motion ('come and look') > concurrent motion

(‘look while coming’) > subsequent motion (‘look and come’) という階層の反例である、(iii) 構文が表すのが AM であるかどうか、AM のうち concurrent motion と subsequent motion のどちらかは動詞の意味に依存する、(iv) この構文は連続・反復の概念を常に表すので、AM がアスペクトから独立した文法的範疇であるとは言い難い。

[G-7]

ランバ語 (M54) の Anterior と属性叙述

牧野 友香

ランバ語には、属性的な事柄を表す形式 (ϕ -形式) がある。この形式は、動詞だけでなく名詞や形容詞とも共起する。ところが、動作性の高い動詞は ϕ -形式と共起ができない。この場合 Anterior を表す形式のひとつである *li*-形式によって属性的な事柄が表されることになる。これは「Anterior を表す形式が、状態変化の完結が表されなくなることによって、単なる状態が表されるようになる (Bybee et al. 1994)」現象がランバ語でも起こっているためであるというのが本発表の主張である。ランバ語には Anterior を表す形式がもうひとつある (*a*-形式) が、属性的な解釈はされない。これは、先行点と参照点との距離が両形式では異なるため、その距離の長い方に使われるのが *li*-形式である。*li*-形式は「距離の長さ」によって状態性を帯び、属性的な解釈を持つようになった可能性がある。

[H-1]

トルコ語における過去接尾辞-DI の「未来」解釈用法 —その出現用法とモダリティー性—

鈴木 唯

トルコ語には、直接体験の過去を表す動詞接尾辞-DI があるが、これから起こる「未来」の事象に使われる用法もある。しかし、先行研究ではその出現条件やその詳細の意味について詳しい記述はなされていない。そこで、本発表では、この用法の出現条件を明らかにし、それがモダリティー性を持つことを主張する。出現状況は、(A) 話者が次の行為に移りたいことを聞き手に宣言するとき、(B) 聞き手による話者への何らかの行為の要求に対し、その行為をすることを断言または約束するとき、(C) 何らかの行為により脅すとき、(D) すぐ後に起こるだろう事象に対して切迫しているときに限られる。さらに、この限られた条件やそのモダリティーの制約により、それに応じて文のタイプや動詞は限られ、この用法の生産性が低いことを説明する。

[H-2]

トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-*dir* の機能：話し手・聞き手の認識からの説明

江畑 冬生

トゥバ語において証拠性を表すとされる接辞-*dir*（およびその異形態-*tir*など）は、動詞述語にも名詞述語にも付加する。接辞-*dir* が動詞述語に付加されることは頻度において稀であり、付加された場合には証拠性の機能（推測や伝聞などの非目撃情報を表す）を果たす。一方で名詞述語（形容詞述語を含む）の場合、接辞-*dir* は極めて高い頻度で付加される。先行研究では名詞述語文での接辞-*dir* の機能を「断定または証拠性」と述べ、名詞述語文では義務的に現れるのだと指摘する。しかしながら発表者の調査によれば、名詞述語文での接辞-*dir* は決して義務的ではない。本発表では名詞述語文での接辞-*dir* の機能について、特に内容疑問文およびその応答文に着目した分析を行った。結論として、名詞述語文での接辞-*dir* の有無は、話し手および聞き手の認識や知識状態を反映していることを主張する。

[H-3]

ブヌン語南部方言のつなぎ形態素 -na-

野島 本泰

ブヌン語（オーストロネシア/南島語族，台湾）の南部方言の形態素 *na* を記述する。*na* は、例(1)のように接頭辞と、場所に関わる概念を表す語基の間に現れる。

- (1) **m-akus-na-sisila**
態接頭辞-非場所性接頭辞（現れる）-*na*-場所性語基（端）
「端に現れる」

na は位置，方向，起点を表すといわれている。この記述が正しければ，例(2)でも *na* が現れてよいはずだが，実際には現れない。

- (2) **ku-sisila**
場所性接頭辞（へ）-場所性語基（端）
「端へ（行く）」

本発表では，*na* のこのような分布を整理し，*na* はつなぎ形態素で，接頭辞および語基の場所性の不一致を解消する機能を持つと分析する。この分析により，ブヌン語動詞の語構成が正しく理解できるとともに，地理的に隣接するサオ語（南島語族）の形態素 *na* も同様に分析できることを示す。

[H-4]

ジェスチャーが言語によって指標されるとき：

アルタ語の位置保持詞 (*placeholder*) の用法と相互行為上の役割

木本幸憲

本研究では、普段の言語使用の中で言語的資源によってうまく表現できない内容をどのような方略を用いて伝えるかについて、アルタ語（フィリピン、ルソン島 ISO-639-3 *atz*）を例に分析する。アルタ語では、ある特定の表現を思い出せない時、その当該表現が埋めるべきであった形態統語的スロット

に、*wa, wana* という形式が生起する現象が頻繁に生じる (cf. 日本語の類似表現として「昨日、あれを釣ったの。カサゴ。」がある)。本節では、これがある形態統語的位置を占める点でフィラーとは異なり、位置保持詞 (placeholder) と呼ばれてきたカテゴリーに属する点を述べ、さらに従来他の言語で観察されてきた多機能性と異なり、アルタ語ではこの位置保持詞が、発話トラブルというコンテクスト以外に、ある表現が言語的ではなく、ジェスチャーや声真似といった非象徴記号で外在化する際にも用いられることを指摘する。

[H-5]

ジンポー語における語頭鼻音の成節性

倉部 慶太

本発表では、[mbol]「糯米」などのジンポー語の語頭に現れる鼻音と後続子音 (NC 連続) の間に音節境界があるか (heterosyllabic) ないか (tautosyllabic) を検討し、前者の立場を支持する複数の証拠を提示する。(a) 直感。母語話者は[mbol]のような語を 2 つの単位としてカウントする。(b) 声調。N と後続母音の声調は異なりうる。(c) 聞こえ度配列一般化。NC 連続には聞こえ度配列一般化に違反するものが多数見られる。(d) 形態素境界。N と C の間に形態素境界が起こりうる。(e) 接辞。単音節語幹を標的とする接辞は NC 連続を持つ語幹に付加できない。(f) 重複。重複は末尾音節を左から右へとコピーするが、N は非末尾の音節としてコピーされない。(g) 楽譜。N は他の音節同様、楽譜において 1 音符が与えられる。これらの事実は NC 連続の N がそれ自体で 1 音節を成し、したがって N と C の間に音節境界があることを示す。

[H-6]

チワン語龍茗方言の声調体系とその通時的考察

黄 海萍

本発表はチワン語龍茗方言の声調体系を記述することを目的とする。母語話者である発表者によって産出された約 6000 の単音節語を音響音声学手法によって分析した。分析の結果、龍茗方言には共鳴音終わりの音節 (平音節) に 5 つの声調 (A1, A2, B1, B2, C)、阻害音終わりの音節 (促音節) に 5 つの声調 (DS1, DS2, DL1, DL2, DS1') が認められることが明らかになった。通時的な観点からは、1) 祖語の声調 *A、*B には分裂が認められるが、声調 *C には認められず、したがって平音節の声調の数がチワン語の他方言より 1 つ少ないこと、2) 促音節の声調の数が他方言より 1 つ多いことが明らかになった。祖語の声調 *C に分裂が生じていないという点において、龍茗方言は、祖語の体系をより忠実に保持する古風な声調体系を持つということが出来る一方、他方言には無い DS1' という声調を発達させている点で、新しい特徴を有する。

[H-7]

ベトナム語の視覚動詞の試行相文法化の展開

山崎 雅人

本研究は、ベトナム語の視覚動詞“xem”《見る》が試行相の意味を有する文法化について、同じ現象を持つ中国語の“看”及び日本語「見る」、朝鮮語“보다”《見る》と比較することにより、これらの試行相文法化の段階的差異に関する考察を行う。「目で見る」を表す“xem”は単独で、もしくは「試す」と言う意味の動詞“thử”に後続して、「～を試してみる」という意味で用いられる。○Chị hãy nhớ lại xem. 《あなた、思い出してみなさい》○Cam ngon lắm, anh ăn thử xem. 《このオレンジは大変おいしい、あなた試しに食べてみなよ》本研究は、試行の意味の“xem”を「漂白化」と「保持化」の概念を用いて分析し、さらに「主観化」の尺度を導入することで、これらの四言語の間では、ベトナム語<中国語≤日本語<朝鮮語の順に視覚動詞文法化の程度の大きさを関係づけられることを主張する。

<ポスター発表 Poster presentations>

[P-1]

古ロシア語現在分詞の単数主格語尾成立における異分析

大山 祐亮

古ロシア語現在分詞硬変化の単数主格には、-y、-a、-ja という三種類の語尾が併存している。このうち-aの由来については、印欧祖語*-ontsに由来するとする印欧祖語説と、軟変化語尾-(i)aに由来するとする類推説の両説が拮抗してきた。しかし、印欧祖語由来説に依拠した場合には *byti* ‘to be’ のような-aをとらない基礎語彙が存在する理由が説明できないため、本発表では類推説を支持する。

一方で、類推説の問題点は、-aの直前に口蓋化が存在しない理由を説明できないことである。しかし、軟変化の-iは語幹末子音に属するため、本来の語尾は-aのみである。したがって、-aは軟変化の語尾をそのまま拡張したものであり、-jaは-aの直前に必ず口蓋化が存在することから起こった異分析の結果であるといえる。すなわちこの事例は、スラヴ祖語以来の-yという語尾に、二種類の類推様式による語尾-aおよび-jaが加わったことによって生じたものだと説明することができる。

[P-2]

形容詞メタファー表現における限定用法の選好：コーパスの用例に基づく「明るい」の一考察

王 軒, 木山 幸子

本研究は、メタファー形容詞の統語構造上の選好およびそれと形容詞の意味拡張との関わりを考察するために、大規模コーパスから得られた「明るい」を用いたメタファー表現を例にし、検証した。その結果、メタファーとして使われる属性形容詞「明るい」は、形容詞一般と同様に限定用法が圧倒的に好まれ、限定用法でより自由に名詞との共起を許しやすい傾向があった。「明るい話題作り・人生」など、「晴れやか」の比喻として用いられるメタファー表現においては、叙述より限定で頻度も共起パターンもとりわけ高いことが示された。また、この限定用法の強い選好性には、「～は明るいものだ」のように、「明るい」とモーダルな表現として形式化した「もの」と共起することによって、日本語におけるメタファー表現の調子を整えていると考えられる。形式名詞「もの」の表現機能が、形容詞メタファー表現における限定用法の選好に何らかの影響を与えているかもしれない。